

平川病院（東京都八王子市）の医師でハーベストクラフト（東京都町田市）の代表を務める土井淳氏は、医師の視点に加えて自身の闘病の経験で得た患者としての目線をモノづくりに生かす。療養生活で発生する患者と介護者双方のさまざまな負担を軽減できる製品を生み出す。「病院が在宅へ」という国策が進む中、当事者を支える製品開発が自宅で生活できる時間を延ばすことにつながる。

「『自分のことは自分でする』『介護者自身に無理をさせない』『自分の家で生活を続けられる』という三つをモットーに」と、土井医師は強調する。手術後の体力の消耗によりベッドで寝たきりになった経験から、介護されることに慣れずに自ら踏み張るためにはどの

医師目線の 医工連携

患者の「自力」動作支える

何かをする際の重要性に気付いた。持ち手付きのサポート「ヨイシヨット」は、両太ももにサポートを巻き付けて持ち手をつかんで引き上げようとして使う。足や下腹部に力が入りやすくなり、足などの筋肉のリハビリや自力での排せつをサポートする。土井医師は「排せつを自力でしようとした経験から、介護されることに慣れずに自ら踏み張るためにはどの



22年秋発売を目指す。介護者が背中に着用して寝たきりの人につかまってもらうことで抱き起こしや移動を補助する。「介護において介護者を助ける視点が抜けている」と土井医師



介護者の背中に装着したベルトにつかまってもらい、寝たきりの患者の起き上がりなどを補助する(ココもって！使用イメージ)

寝たきり防ぎ介護負担軽減

は指摘する。医師として在宅介護する人と接する中で見えてきた、介護者だけを頑張らせないためのモノづくりが形になりつつある。介護現場では困りごとを解消するためにさまざまな取り組みがされているという。「工夫を盛り込んで製品として世の中に出すことで、誰もがその知恵を使えるようになる」と土井医師は強調する。介護問題が社会的に大きくなる中、医師の知見を生かして患者や介護者の目線に立ったモノづくりがさらに求められる。(隔週火曜日に掲載)

平川病院（東京都八王子市）